

駿建

2013 Jan. Vol.40 No.4

日本大学理工学部建築学科 日本大学短期大学部建築・生活デザイン学科

# SHUNKEN

*Quarterly Journal of  
Department of Architecture, College of Science and Technology, Nihon University  
& Department of Architecture and Living Design, Nihon University Junior College*



[SPECIAL FEATURE]

世界を旅しよう！  
Make a World Travel

Special Feature

# 世界を旅しよう



「人が旅をするのは到着するためではなく、旅をするためである。」 <ゲート>

「世界は一冊の本にして、旅せざる人々は本を一頁しか読まざるなり。」 <アウグスティヌス>

「長生きするものは多くを知る。旅をしたものはそれ以上を知る。」 <アラブの諺>

「他国を見れば見るほど、私はいよいよ私の祖国を愛する。」

「人の心の中にしか残らないもの、だからこそ何よりも貴重なものを、旅は僕らに与えてくれる。」 <村上春樹>

## Make a World Travel

現在、世界には 195 の国があります。

あなたは、これまでにどれくらいの国へ旅をしたことがありますか？

この頁の下部に、さまざまな偉人たちの旅にまつわる明言を集めてみました。

大学時代は、人生の中でも時間を有効に使うことができる大きなチャンス。

旅へ出た分、移動した距離の分、新しいことに会うあなたは、

きっと旅によって新しい可能性を広げられるに違いありません。

今回の駿建では、学内外の「世界への旅」を集めてみました。

何故、旅に出るのか、その目的も、そして何を得るのか、その収穫もさまざまです。

いろんな旅を参考に、次の春休みや夏休みには、是非あなた自身の旅を実現してみませんか。

Photo=Toshihiro Oimatsu



「旅人よ、道はない。歩くことで道は出来る。」 <アントニオ・マチャド>

「青春を旅する若者よ。君が歩けばそこに道ができる。」 <永井雲龍>

「何かをやって時間を損するという事は絶対ない。貧乏旅をすれば、大学を二つ出たようなものだ。」 <永倉万治>

<スタール夫人>

「あちこち旅をしまわっても、自分から逃げることはできない。」 <ヘミングウェイ>

「全ての旅行はその速度が正確に定まってくるにつれ退屈になる。」 <ラスキン>

TRAVEL  
THE  
WORLD

## 1

## 海外研修旅行Aコース

24日間、ヨーロッパ7カ国  
近現代建築を巡る旅

Text = 山田明加 (建築学専攻 M2/ 佐藤光彦研)

2012年度海外研修旅行Aコースのヨーロッパコースは、ポルトガル、オランダ、フィンランド、スウェーデン、デンマーク、ドイツ、フランス全7カ国の近・現代建築を中心に巡る旅でした。

何よりも感動したのは、これまで私たちが、雑誌や書籍を通じて見てきた建築や空間を、実際に目の前にした時でした。圧倒的な迫力、感じる光や風……。頭で理解することよりもすべて刺激的でダイレクトに受け取る体験だったのです。

全24日間という長い行程では、毎日が目まぐるしい勢いで過ぎていきました。連日のハードなスケジュールにも関わらず、日の入りが遅いことをいいことに、自由研修時間では日が落ちるまで全体研修では回りきれなかった場所に足を運び、日付が変わる頃まで先生方や学生のみならず共に美味しい食事とお酒と会話を楽しみました。建物を見ることだけでなく、旅そのものの楽しさを感じることができたのも大きな収穫となりました。

帰国してしまうと、旅行中に得た情報や知識、感動や疑問が、溢れて流れ出てしまうのではと心配になるほどのものがありました。きっと、私を含め、同行したみんなも帰国した今もまだ、すべてを消化しきれない状態かもしれません。しかし、消化することが目的なのではなく、体験したという事実と感覚こそが、大切なのではないかと感じています。さらに、それらを今後どこかで活かす機会に巡り合うことができるなら、素晴らしいことだと思えます。

(※表紙写真は、サヴォア邸前にて撮影したAコース参加者の記念写真)

## Make a World Travel

## Overseas Study Tour [A] course

Lisbon&gt;&gt;&gt;Porto&gt;&gt;&gt;Amsterdam&gt;&gt;&gt;Rotterdam&gt;&gt;&gt;Helsinki&gt;&gt;&gt;Stockholm



引率教員：佐藤光彦教授、廣石秀造助手

参加学生：建築学専攻M2・佐藤光彦研／村山寛子、山田明加、建築学専攻M1・佐藤光彦研／山本尚史、建築学科3年／松村朋恵、山本友梨香、和田優、八木橋奏未、菅野貴行、山田久美子、阿部龍之介、花田幸子、田部菜津子、村上勝平、向井雄太、福澤大吉、行徳美紗子、小島弘旭、江崎桃子、田所拓馬、汐見宏明、尾崎圭亮、赤根広樹、岡崎凌、藤田貴志、青葉光、今野政憲、田島明佳、坂本育哉、齊藤史晃、助川陽平、野路卓真、帆足洋平

olm>>>Copenhagen>>>Berlin>>>Paris



7



10



18



8



11



15



19



8

12



16



20



9



13



17



21



14

1. スティーブン・ホール設計、国立近代美術館（フィンランド、ヘルシンキ）
2. イェンセン・クリント設計、グルントヴィ教会（デンマーク、コペンハーゲン）
3. OMA 設計、カーサ・ダ・ムジカ（ポルトガル、ポルト）
4. ユハ・レイヴィスカ設計、グッド・シェパード境界（フィンランド、ヘルシンキ）
5. 雑貨店（ポルトガル、ポルト）
6. Teofilo Seyring 設計、ドン・ルイス1世橋（ポルトガル、ポルト）
7. MVRDV 設計、Silidom（オランダ、アムステルダム）
8. オーギュスト・ペレ設計、ル・ランシーの教会（フランス、ランシー）
9. 歴史地区（ポルトガル、ポルト）
10. MVRDV 設計、オクラホマ/WOZOCO（オランダ、アムステルダム）
11. カラトラバ設計、オリエント駅（ポルトガル、リスボン）
12. アスブルンド設計、ストックホルム市立図書館（スウェーデン、ストックホルム）
13. ラグナル・エストベリ設計、ストックホルム市庁舎（スウェーデン、ストックホルム）
14. ピーター・アイゼンマン設計、ホロコースト記念碑（ドイツ、ベルリン）
15. チッパーフィールド設計、新博物館（ベルリン、ドイツ）
16. リベスキンド設計、ユダヤ博物館（ベルリン、ドイツ）
17. オリピック・ドーム（ベルリン、ドイツ）
18. リートフェルト設計、シュレーダー邸（オランダ、ユトレヒト）
19. BIG 設計、エイトハウス（コペンハーゲン、デンマーク）
20. ミース設計、新ナショナル・ギャラリー（ドイツ、ベルリン）
21. ベルラーヘ設計、アムステルダム旧証券取引所（アムステルダム、オランダ）

# Overseas Study Tour [A] course SNAP PHOTO GALLERY

旅の楽しさが伝わるかな。  
学年を越えて異国の地で過ごした24日間、  
旅のワンシーンを収めたスナップ写真を集めてみました。

Lisbon>>>Porto>>>Amsterdam>>>Rotterdam>>>Helsinki>>>Stockholm>>>Copenhagen>>>Berlin>>>Paris



SHUNKEI 2013

Jain

vol.10 no.4

2005

TRAVEL  
THE  
WORLD

2

海外研修旅行 B コース

10年ぶりにアメリカコースが復活！  
アメリカ5都市を巡る15日間の旅

Text = 渋谷舞 (建築学専攻 M2/ 佐藤光彦研)

8 月21日から9月5日までの15日間、シカゴ、ピッツバーグ、ボストン、コネチカット、ニューヨークの5都市を巡る海外研修旅行Bコースに参加してきました。誰もが知っている落水荘やファンズワース邸(下写真)など近代の名作建築から、革新的な現代建築まで、さまざまな建築に触れる旅となりました。

学部時代に海外研修に行かなかったことを、後悔するくらい本当に楽しいひと時を過ごすことができました。今まで、本などで見ていた建築を実際目で見る、街を歩くこと、あらゆること全てが勉強になる日々の連続でした。行って初めて分かるディテールや空間は自分自身の世界観を変え、建築に対する思いも一層強くなりました。引率の渡辺先生が現地の事務所の方とコンタクトをとってくださり、パーキンス・イーストマンや

コーン・ペダーセン・フォックスの事務所を見学させていただき、さらにディナーも御一緒させていただくという素敵なイベントなどもありました。個人旅行ではできないこともたくさん経験させていただきました。

私自身、最も美しいと感じたのはSOMのベイネック稀覯本図書館でした。閉架書庫の保存の仕方や大理石の用い方がとても美しく、フロアにあるソファにずっと座っていたいくらいでした。訪れた都市の中では、やはりニューヨークが一番魅力的でした。4日間の滞在ではとても足りなかったので、数年以内に再び行こうとすでに計画しているところです。

もちろん、研修旅行は建築を勉強するだけではありません。自由研修の夜は目一杯遊び、食事を楽しみました。シカゴでは皆でHUMMERのリムジンに乗ったり、建築クルージングをしたのも良い思い出です。NYでは現

地へ留学している友人と合流し建築巡りや買い物ツアーをしたり、工場をコンバージョンした素敵なマーケットでオイスターやロブスターを食べたり、大好きな海外ドラマのロケ地に寄り道したり。帰りの飛行機まで疲労感を感じないほど、充実した15日間でした。

私は今年で卒業ですが、後輩のみなさんには是非海外研修に参加して、授業だけでは得られない経験をしてもらえたらと思います。■

引率教員：渡辺富雄准教授、宮里直也助教

参加学生：建築学専攻M2・空間構造デザイン研/細山輝明、小笠原康祐、松本良太、佐藤章、熊坂まい、佐藤光彦研/渋谷舞、建築学科4年/濱田仁、建築学科3年/小林幸弘、櫻井雄輝、斎藤麻美、宮井楓、佐々木絢子、蔵本陽香、玉利仁史、劉樹昆、金井ゆう、学部2年/浅野泰輔、安藤将哉、小松将之、神保亜由美、飯田雄大、鎌田久美子、菊池俊二、河合恵実、石坂有美子



## TRAVEL THE WORLD

# 3

### TUD x CST デザインワークショップ 11年ぶり、ドイツ・ダルムシュタット 工科大学とのワークショップ

Text = 佐藤慎也 (建築学科准教授)

ダルムシュタット工科大学 (Technische Universität Darmstadt=TUD) とのデザインワークショップは11年ぶり。1999年にドイツ・ダルムシュタット、2001年に東京と、これまでに2回のワークショップが行われ、何れも本杉省三教授 (CST) と Moritz Hauschild 教授 (TUD) が中心となって開催された。今回も2人を中心に、再び国外で行われることになり、9名の学生が参加した。99年のWSはTUDキャンパスで行われたが、今回はTUDのセミナーハウス Waldemar Petersen Hausが会場。実際に行って驚いたのが、そのセミナーハウスはドイツとの国境沿いの Hirschegg というオーストリアの村に位置していて、そこは近所に5つ星ホテルが建ち並び美しい山々に取り囲まれた保養地だったのだ。

ワークショップで与えられたテーマは「Tuning」。ミュンヘンの Karlstadt (ドイツ各地に展開しているデパートチェーン) が計画建物として選ばれ、周囲のヨーロッパ的なまち並みに対し、建築面積、延床面積ともにフィットしていない状況を「チューニング」することへの提案が求められた。山奥のセミナーハウスで、ミュンヘンという都市を考える。もちろん現地調査を行うことができるわけもなく、イン

ターネットを用いた敷地調査が行われる。日本の学生にとっては、Karlstadt もミュンヘンもなじみがない。そして、ドイツ学生とのコミュニケーションに用いられるのは英語。こうして、周りには絵画のような風景が広がっているにも関わらず、セミナーハウスの会議室に缶詰となったワークショップが続けられた。

さすがに Hauschild 教授も気を利かせてくれて、周囲へのハイキングなどのレクリエーションも行われた。もちろん、双方の学生がセミナーハウスに泊まり込んでいたのだから、食後のビールも毎晩欠かせないものだった。期間は短いワークショップであったが、学生たちは密度の濃いコミュニケーションを取ることができたようだった。

ワークショップは、基本的に日本とドイツの学生が2人1組のチームをつくって進められた。模型をつくる環境もないことから、調査だけでなく、最後のプレゼンテーションに至るまでコンピュータが駆使される。オーストリアの保養地で、ミュンヘンのプロジェクトを、英語とインターネットを用いて組み立ててゆく。ある意味、非常にグローバルで現代的な状況の中で行われたワークショップは、日本では得ることのできない体験を学生たちに与えたのではないだろうか。



## Workshop

引率教員：本杉省三教授、佐藤慎也准教授

参加学生：建築学専攻M1・佐藤慎也研究室／堀切梨奈子、建築学科4年・横河研究室／岩田理一郎、山口高広、都市計画研究室／勝又真理子、建築学科3年・河野将太、小島弘旭、立川博行、松本泰佑、松森みな美

## Recreation





参加したみんなに聞いてみました。

## ドイツの建築学生とのワークショップに参加してどうでしたか？

朝、少し早起きしてセミナーハウスを出ると、空がピンク色でした。大自然に囲まれた牛や羊がいる町で、午前中はハイキング、午後は課題、夜はお酒を飲みながらお喋りをして過ごしました。パートナーだったパトリックと言葉を交わすうち、彼の考え方や高いスキルに感銘を受けると同時に、私自身が学生生活で培って来たものを知ることでもできました。国は違えど同じ建築を学んできた彼とゆっくり話せたことは、とても大切な時間です。ワークショップの前後に訪れたいくつかの町では、街頭展覧会やフリマ、移動サーカスなど、偶然のわくわくに沢山出会いました。これからもきつと繋がる「いま、ここだけ」がぎゅっと凝縮された、すてきな経験になりました。

堀切梨奈子（建築学専攻 M1 / 佐藤慎也研）

集合場所と日時以外は、何の情報も得られないままワークショップへ参加することとなりました。いつもの設計課題とは違い、現地調査もないまま、ネット上の情報を基に、ひとつの建築物を完成させるということは、初めての体験でした。また、メンバーとの意見の相違から、何度も衝突し、とても苦労しました。とにかく1週間という短い期間中、ひたすら時間に追われる日々だったので、実際に得るものは少なかったのかもしれませんが、しかし、文化の異なる人たちと協力して、ひとつの作品を仕上げるということは、貴重な体験であったと感じられました。ワークショップ終了後、ダルムシュタット工科大学の先生と建築を含むさまざまなことについて深く話す機会を持ったことがとてもよい思い出です。

勝又真理子（建築学科 4年 / 都市計画研）

海外の学生の人たちは、どんなことを考えているのだろうか？そんな気持ちで今回のワークショップに参加しました。実際の課題は、しっかりと敷地が与えられていて、想像以上に難しい課題でした。英語力にも自信はなく、不安でいっぱいでしたが、パートナーを組んだ中国からの留学生 Ma Yunpeng 君と絵や漢字を使ったり、工夫をしながらエスキスやコミュニケーションをするのがとても楽しかったです。ワークショップ以外にもハイキングに行ったり、滝を見に行ったり、旅行としても楽しめて、とても良い経験となりました。パートナーのMa君とは短い間でしたが、とても良い時間を過ごせて楽しかったです。ありがとう Ma 君！

松本泰佑（建築学科 3年）

ワークショップは、日大とダルムシュタットの学生が2人1組でリノベーションをテーマとしてコンセプトを考え、提案するというものでした。このワークショップでは、自分の話している言葉の意味が、いかに曖昧なのかということに気付かされました。例えば、「建物の機能」について聞いているのに、相手には「コンテキスト」を聞いているのだと誤解されてしまったり。このように、言葉そのものに対する認識の違いから、互いの考えの経緯をつきつめて会話しなくてはいけないことが大変でした。普段の自分は、いかに緻密な会話ができているのかを痛感しました。

立川博行（建築学科 3年）

昨年の海外研修旅行に続く、人生で2回目の海外訪問がこのデザインワークショップでした。同じ4年生の友人から誘われて参加しました。5日間という短期間の外国の建築学生たちとの交流。そこで僕が得たものは、劇的な建築観の変化でもなければ技術的な上達でもなく、ドイツという

異国の文化のもとで建築を学んでいる彼らと価値観を共有できたことに対する純粋な喜びと自信でした。多少の言語の壁を押ししのけ、ひとつのクリエイションを通してデザインを語り合い、ユーモアを分かち合い、気付けば瞬間に過ぎていった5日間。それらがどれだけ貴重で有意義な時間であるかは是非自分の目で耳で体験してほしいと思います。建築という分野を超えて、文字通り「世界が広がる」素晴らしい経験でした。

山口高広（建築学科 4年 / 横河研）

ダルムシュタットの建築学生と国際交流を含めたワークショップは、刺激だらけの毎日でした。最初から異国の地、現地集合という大きな難問。着いた瞬間からはダルムシュタットの学生たちと英語でコミュニケーションを取りながら昼間から飲み会。本当に楽しかったです！課題に対しては、向こうの学生とペアを組み、互いの考えを出し合ってきました。お互いの国柄の違いが垣間見えたり、時には同じように悩んでいることがわかったりしながら、自分の考えの幅も広がったような気がします。ワークショップが終わった後も、ダルムシュタットの何人かとは Facebook でつながっています。今回だけでなく一生もの価値が得られたと思います。今回のような機会を与えてくれた先生方、またワークショップに携わったすべての方々に感謝します。ありがとうございました。

岩田理一郎（建築学科 4年 / 横河研）

彼らはとても合理的で効率的だということを実感できたのがこのワークショップでの大きな収穫でした。ペアの女の子と話している中で、日本の学生が設計で大事にしているのは実は世間体のみであり、ほとんどが評価されたいという欲からくるものだと思われました。彼らから、課題で求められていることを明確に把握し、それに対してシンプルに応えようとする姿勢をとることも感じました。また、自分の考えを英語で上手く伝えられないときにお互い描き合った大量のスケッチが、後々頭の中や案の進行具合を整理するのにとても大事であると改めて感じることができました。紙とペンで整理し、PCで図面を描き3Dを立ち上げる。言葉だけで言うのと皆いつもやっているようなことだけど、この2種類の作業をより差別化させることの大事さに気づけたのは Hauschild 先生のおかげだと思います。このような刺激的なワークショップに参加でき大変嬉しく思います。

松森みな美（建築学科 3年）

今回のワークショップでは、多くの困難に直面しました。まず1つ目は山登り。朝起きてご飯を食べ、山に向かう。セミナーハウス周辺は自然に恵まれ、登るべき山がたくさんありました。日本では味わえないような空気をいっぱい吸い込み、午後からはドイツ側のパートナーと設計に勤しみました。2つ目の困難は、言葉の壁。ドイツ側の学生は、流暢に英語を使いこなして自分の意見をはっきりと伝えてきます。僕もなんとか伝えようとしたのですが、なかなか伝わらないことも多くなっていきます。そうするとだんだんと口数も少なくなりコミュニケーション不全に陥ってしまいました。もっとうまくコミュニケーションをとることができていたら、さらに実り多いものになっていただろうと反省しながら、私たちと異なったモノの見方や考え方に触れることが、これからの設計に役立つことも多いと痛感しました。とてもいい経験をすることができました。

河野将多（建築学科 3年）

## Party



世界は果てしなく広い

# いろいろな旅を見てみよう!

海外研修旅行やワークショップなどを海外に触れるきっかけにするのもひとつの手段ですが、自らの手で行き先を決め、飛行機やホテルを予約し、ガイドマップを片手に行ってみるのもいいかもしれません。日本でもようやく LCC と言われる格安航空会社の参入が活発化。アジアなら1万円台から、アメリカやヨーロッパも5万円台から航空券(往復・燃料代込み)を購入できる時代になりました。旅の目的や楽しみかたには、唯一の答えなんてありません。そのときどきの状況やそれまでの経験値によって、その人が旅に求めるもの、そして得られるものも、常に変わり続けていくものなのでしょう。ここでは、5人の個性的な旅を取り上げます。ワクワクしてきたら、次はあなたの番です。ぜひ、春休みや夏休みに、あなただけの旅にトライしてみませんか？

## TRAVEL THE WORLD

### 4

### タイ、シンガポール、マレーシア 成長し続ける東南アジア 3都市を飛び回る10日間!

Text = 大西正紀 + 田中元子 (mosaki)

みなさん、こんにちは!「駿建」の編集・デザインをさせていただいています、mosakiの大西と田中です。まずは、私たちのあるアジアの旅をご紹介します!全部詰め込むことはできないけれど、10日間の興奮の一部をご覧ください。

## Bangkok, Thai



### 10月4日(月)-5日(火): バンコク

午前8時成田国際空港発 [TG643]、同日14時タイ・バンコク着。異国へ着いて、到着口を出たときのその国の匂いは、いつも興奮するもの。

どんな国も、まず到着したらホテルにチェックイン。そしてすぐに**主要交通を確認がてら、街の中心部へ行くのが私たちの旅の定石**です。バンコクの主要交通は、バンコクの通称「BTS」と呼ばれるモノレール。中心部で本場のパッタイを食べたら、街を歩きはじめます。最新の商業施設で現地カルチャーに触れながら、最後に立ち寄ったのはちょっと物騒なスク



ンピットエリアへ。ここではスーパーへ。どの国へ行っても、**どの都市へ行っても、現地の人々が日常生活で利用するスーパーへ行くのも必須**です。ここでは、さまざまな商品を介して、その国ならではの生活や文化をかいま見ることが出来ます。お土産もこんなところで探した物のほうが喜ばれたりもします。

宿泊したホテルは、中心部から少しだけ離れた Fraser Place Langusuan。高層のサービスアパートタイプのホテルなので、キッチン付き。リビングも広く全体は約100㎡。それで1室1泊1万円! こういうものは全てネットで簡単予約が基本です。



Bangkok International Airport



### 10月5日(火)-6日(水): シンガポール

バンコクはまたあとで楽しむとして、旅の2日目はさらに移動。午前9時、バンコク国際空港に現れたのは、Tiger Airways のジェット機。これが噂の LCC です。この便は片道で2550 パーツ (6915 円)! こうして LCC を利用すると、**格安で世界中の都市を回ることも可能**。LCC のみを利用すると、20万円以上あれば世界一周ができるそう。いつかそんな世界一周もしてみたいものです。

12時、シンガポールに到着。タクシーで20分ほど走ると、もうそこは中心部です。目の前に飛び込んできたのは、ホテル・マリーナベイサンズ。今回のシンガポールでの目的は、このホテルに宿泊し、高さ200mに広がる長さ150mの天空のプールで泳ぐこと。到着するやいなや55階まで上がると、目の前に広がるのはまるで空に浮くプール。泳いでいると水面の向こうには、空と雲、そしてシンガポールのビル群が。得も言われぬ体験に日が暮れるまで泳ぎまくりました。

この建物はイスラエルの建築家で、世界的に活躍するモシェ・サフディ設計によるもの。海辺の触先に建つこの異形のシンボリック建築が、世界におけるこの国の求心力そのものを象徴していました。まさに元気を与える建築とはこのことかもしれません。

夜は市街地を散策。前日までの F1 大会の熱気がまだ残る街中を練り歩きながら、ホーカーセンター

## Singapore



(屋内型の屋台が集まる飲食施設屋台) へ。シンガポール料理を満喫して明日に備えます。

### 10月6日(水)-8日(金)：クアラルンプール

シンガポールからマレーシアへは LCC で片道 1500 円。もはやバス感覚。ここでハプニングが発生！クアラルンプール空港から中心部へ向かう電車の中で後ろから「もしかして mosaki さんです

## Kuala Lumpur, Malaysia



か？」と声をかけられたのです。声をかけてくれたのは北京で活躍する日本人建築家、迫慶一郎さんの下で(当時)働かれていた建築家の内野智之さん。なんでも、私たちの Twitter を見ていたら、同じ飛行機、同じ電車にすることが分かり、勇気を振り絞って会ったこともない私たちに声をかけてくれたのだそう。その後も内野さんとは、現地で連絡を取り合い、クアラルンプールの夜を共に楽しみました。

### 10月8日(金)-10日(日)：バンコク

そして再びタイへ。僕らの旅は、朝から深夜まで、とにかく歩き続けます。地図一つで、観光施設から現地の人しか立ち入らないようなエリアまで行っただけで、見て、話して、そして食べます。そしてとにかく乗り物に乗ります。電車、モノレール、バス、トゥクトゥク、水上バス、自転車…そして走る！旅先ではできるだけジョギングをするようにしています。その時間だから見えるもの、移動するスピードによってこそ感じるものが、そこにはあります。

今回の旅の最後も走りました。ある日、バンコクの街を歩いていると、ミニマラソン大会の看板を発見！都市バンコクの中心を走れるなんて、こんなチャンスはない、と参加受付を済ませたら早速参加準備を。日中は暑すぎるからなのか、なんと午前 0 時にスタート！人が多く、犬も走ってる、そして暑い、湿度が高い、たった 10 キロがとても長い、そして街が暗い(笑)、車も走ってる(笑)。圧倒的な違和感や異質感を身体いっぱい受け、自分で考える。これが生きるクリエイティブにつながる。これこそが旅の醍醐味だと、改めて感じる旅となりました！

## Bangkok, Thai



### who is mosaki ?

「**駿** 建」の編集ディレクションをしている mosaki (モサキ) は、大西正紀(編集者、建築家 / 2003 年建築学専攻博士前期課程修了) と田中元子(ライター、クリエイティブファシリテーター) から成るクリエイティブユニットです。東京の表参道に佇んでいた同潤会青山アパートの保存再生運動「Do+」や、美術家中村政人氏の自邸リノベーションプロジェクト「湯島もみじ」、そしてロンドンでの生活をきっかけとして、2004 年から mosaki として活動しています。

田中は、小さなころからモノのデザインと成り立ち、社会との関係に興味があり、ある本と出会い、建築が大好きになりました。その後、独学で建築を学びながら、ライター業をはじめました。人と人、人とものごとを積極的に結びつけることをモットーに活動しています。

大西は、音に関われる職業に就きたくて建築を学びました。しかし、気づけば設計デザインに没頭し、大学院を出た後はロンドンの設計事務所ウシダフィン

ドレイアーキテクト (UK) に勤めました。

しかし 2 人は、ロンドンでの生活を通して目の当たりにした建物と人々の関係に驚きました。そして、専門的な視点は持ちつつも、建築にまつわるさまざまなものを、より社会へ開くことはできないかと帰国し mosaki を結成するにいたったわけです。

「一般の人と、建築の世界を結ぶ役割を見付けたい」、「建築は建築以外のことに包まれて成り立っている。建築の周辺を豊かに面白くしたい」。mosaki の活動は、この 2 つをモットーに仕事の領域を限定することなく、執筆や雑誌、書籍、ウェブマガジンの編集、アプリケーションやその他メディア、イベントやワークショップなどのディレクションなどを日々行っています。最近では、建物の形を身体で真似る「けんちく体操」というコンテンツを、世界中に普及する活動もさまざまな形で展開中です。興味をもっていただいた方は、ウェブサイトのをぞいでみてくださいね！

例えば、こんなものもつくっています。



<http://www.mosaki.com>



左：ボンビドゥー・センターとその前に広がる広場。さまざまな人々のさまざまな広場の使い方を見ることができる。右上：宿泊したユースホステル。ユースホステルは、世界 80 カ国に 4000 の施設をもつ世界最大の宿泊施設ネットワーク。比較的安く、安全で清潔なのが特徴。右中：食の街リヨンにて。写真を見ているだけでも、匂いを思い出させる。右下：SANAA 設計の ROLEX ラーニングセンター。

## TRAVEL THE WORLD

# 5

### パリ、リヨン、ローザンヌ、チューリッヒ 海外を旅することは、感覚を磨くこと 欧羅巴 5 都市 10 日間の男 2 人旅

Text = 小島弘旭（建築学科 3 年生）

パリ、夢あふれる街での男 2 人、なんとも夢のない待ち合わせから、旅ははじまりました。友人と現地が無事合流し、パリ、リヨン、ローザンヌ、チューリッヒをまわる、楽しみと不安でいっぱい 10 日間。ユースホステル滞在や海外での長距離電車移動、2 人旅……。初めて尽くしの旅となりました。

まず、待ち構えていたのは海外での洗礼でした。ゆったりとオープンテラスで食事をしていたとき、友人が携帯をとられたのです。なんと犯人は 2 人の物売り（に見せかけた）少女。巧みな早業！今でこそ笑話のいい教訓です。

ヨーロッパといえば、統一された街並みと人々が思い思いに過ごす広場。いきいきと使われる広場や門越しに見えるさまざまな中庭は、豊かな表情をつくり出していました。中でもボンビドゥー・センター前の広場は印象的でした。周囲からは異質な芸術の拠点の前に広がるゆるやかな傾斜の広場には、座って話す人、自身の作品を売る人、

寝転がる人、走り回る子供や犬。人々はリビングのようにつろぎ、ひとつの場所にたくさんの行為が重なる風景が広がっていました。これには西欧の靴のまま生活するという背景も関係があるのかな、などと思いながら日本ではあまりない風景が小気味良かったです。

内部化された中庭のような空間を持つジャン・ヌレ邸や起伏ある街から続く豊かなシークエンスをもつサヴォア邸。地形的な床が内外に多様な場を生む ROLEX ラーニングセンターでは、用途や気分に合わせて自分で居場所を見つけてくる人々の風景が印象的でした。どれも欧州の生活の背景との関係や実際に体験してこそ、空気や質感、シークエンス、スケール、光などを味わうことができました。

旅の醍醐味のひとつは「食」。小さなレストランが立ち並び、どこからともなく良い匂いが漂ってくるリヨンで美味しいご飯とゆったり流れる時間を過ごしたことは印象的な思い出です。そ

んなリヨンから電車に揺られること数時間、待望のロンシャンの礼拝堂へ向かう道中では、うれしい出来事がありました。ロンシャンまでの交通手段がなく困り果てていると、近くのお店の人が僕らの拙い英語を必死で理解してくれて、タクシーを呼んでくれたのです。言語の壁が楽しい体験となったのでした。

今回の旅を通して、海外を旅することは、感覚を磨くことだと痛感しました。普段の生活には情報が溢れています。しかし、自分自身が全身の感覚で体験することが、何よりも情報収集装置となるのかもしれませんが。言語や生活など、多くの物事が異なる環境に身を置くことは、敏感かつ素直にさまざまなことを感じることができるようになる。さまざまな国で現地の人々と対話をしたり、街や建築の持つ空気を全身で体感することで、自分の感覚が磨かれ、普段の生活でもちょっとした違いへの気づきが、普段の生活をより楽しくしていると感じています。 ■

TRAVEL  
THE  
WORLD

6

コスタリカ、リベリア  
都会にすむ動物は犬や猫だけじゃない！  
25日間グリーンツーリズムの旅

Text = 山崎誠子（建築学科助教）

**南**米の国コスタリカはグリーンツーリズムの発祥の国として知られています。海に囲まれ標高差が大きいため、植生が「熱帯乾燥林」、「熱帯林」、「高山植物・熱帯雲霧林」、「熱帯雨林」と大きく4つに分かれており、国内で確認されている動物種は50万種以上、植物種は研究されているだけでも1.2万種以上もあるといわれています。**世界中の全動植物種の5%が生息し、鳥類・蝶類・植物のラン類に至っては10%も自生するのだ**というから驚きです。

そのような自然豊かなコスタリカの中央に位置し、標高1100mを越える首都サンホセを起点に、25日間をかけて8か所の都市や村を巡りながら、さまざまな場所への視察を行い、グリーンツーリズムと国立公園の整備状況を視察するために旅をしてきました。

サンホセは標高が高いため、その気候は常春といわれ、一年中東京の春のようです。一方、サンホセからバスで4時間

ほどの距離にある北部のリベリア（国際空港もある比較的都市化の進んだ都市）へ移動すると、気候帯は熱帯乾燥林になるため、街には緑がとて多くなっていきます。

リベリアで宿泊したホテルの近くは銀行、役所、マクドナルドやケンタッキーもある商業ゾーンでした。ちょっと買ひものに出ると日本で野良猫に会うように出くわすのがイグアナ。これがネコよりもずいぶん大きいのです！最初はギョッとしましたが、とても動きが鈍く、人間には何も危害を加えてこないで、しばらくすると慣れました。グリーンツーリズムが目的でしたが、こういったアニマルツーリズムもまた、予想外の体験となったコスタリカでした。

私もさまざまな国を旅してきましたが、**何よりも健康であることが一番です。絶対に無理はしない。**また行けばいいことですからね。

【旅】



サンホセの一番にぎわいのあるエリア。



上：リベリアのホテル。床には殺虫剤がたっぷり塗ってあり、アリの侵入を防ぎます。中：リベリアの中学生たち。コスタリカは教育熱心な国です。下：リベリアのおしゃれなカフェでランチ。コスタリカの飲食店やホテルのほとんどがWi-Fi対応でした。どこでもノートPCでメール書いたりできます。



左上：モンテベルネの環境ガイドさんとランチ。コスタリカの食事は朝も昼も夜もほぼ同じ。1枚の大きな皿に、ライス、メインのミート、サラダ、豆の煮たもの、バナナのソテーが載る。日本人には抵抗のない味です。右上：モンテベルネの熱帯雲霧林。左下：マニエル・アントニオでみたナマケモノ。中下：若いイグアナ。右下：カーニョネグロのワニ、川の脇の牧場にいました。



コスタリカ北西部のサンタ・ロサ国立公園。乾季はこの景色がすっかり茶色になります。

## TRAVEL THE WORLD

# 7

### ドイツ、ヴァイセンホルン 16世紀の倉庫を19世紀に改装した 小さな町に建つ劇場を探し求めて

Text = 本杉省三 (建築学科教授)

**ヴ**ァイセンホルン旧市街は10分も歩けば通り抜けられてしまう小さな町である。フッガー一家ゆかりの街と名乗っているが、ほとんど知られていない。そこに倉庫を改造してつくられた140席のヴァイセンホルン市立劇場があるのを知って行くことにした。

元々は税として徴収した穀物の倉として建てられ、その後これまでに消防用の備品倉庫、グライダークラブの作業場、市の霊柩車置き場、そして映画館など色々な役割を担ってきた。劇場改装時に一部の梁を切断してしまうなど大胆な構造的変換も行っていて、最近の大修復でさらに補強が実施された。こうした建築を訪ねる度に、建物の命が機能でなく魅力によるものだと思知らされる。人々の柔軟な発想と逞しさに出会えてホッとする。

建築は、建築の裏まで見る、使っている人や関わっている人に話を聞きながら見学しないと多くを学べない。そのためには、こちらの目的を伝え、先方とアポイントメントをとる必要がある。連続する日程の中で、訪問先ルートと先方の都合良い日程を組み立てるのはなかなか容易でなく苦労するが、その手間を惜しんでは成果もない。

日中は見学、夜は観劇、と一日中楽しめる半面、買い物などの遊びはない。まあ、人からすれば私のしていること自体が遊びなのかもしれないが。ただ、旅行中、夜を如何に楽しむかで随分旅行の印象も変わってくるはずで、是非劇場やコンサートにも足を運んでほしい。劇場は色々な年齢層・階層の人が集まる場所で、服装や様子を見ているだけでも楽しい。



上：ヴァイセンホルン市立劇場。かつて市壁があったところは取り壊され公園となっている。階段は避難用にその後つくられたもの。左下：客席から舞台を見る。右下：1997年に大掛かりな修復が行われた。写真は補強された鉄骨の梁や水平ブレース。



左：外観が修復された元 Schranne (穀物市場)。右：その1階。建設当初はピロティだったところが、その後改造され内部化された。現在は音楽、芝居、レクチャー、パーティーなどさまざまに使われている。



左：劇場を見学後 Burkhard さん宅に招かれ資料を見ながら懇談、中央は大学生の次男。右：ドイツに行くとき必ず食べる鱈のバター焼き。ウルムのかつて漁村があった地区のレストランで鱈を食べました。

TRAVEL  
THE  
WORLD

## 8

ポルトガル、リスボン


26泊27日、欧米4カ国  
周遊の旅 - リスボン編 -

Text = 田嶋和樹 (建築学科助教)

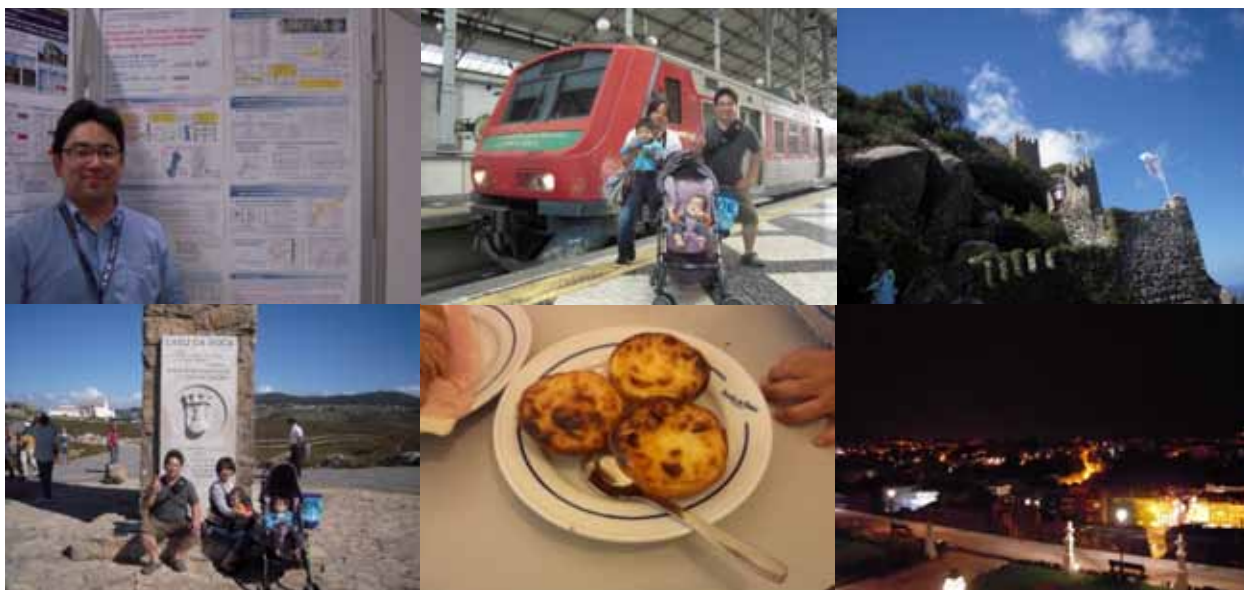
**旅**の目的は、海外派遣研究員として欧米諸国を訪問し、RC構造物の損傷評価に関する研究に役立つ知見を得たり、人脈を築くことでした。そして、約1カ月に渡る旅の最終目的地がリスボンでした。ここでは、4年に1回開催される世界地震工学会議に参加しました。(次項に関連記事)

さて、国際会議の合間にリスボン近郊の街・シントラ〜ロカ岬〜カスカイスへのエクスカージョンを計画しました。電車やバスを乗り継ぎながら移動しましたが、電車好きの長男が大喜びでした。機嫌を良くした長男が大人でも大変なムーアの城壁を駆け上がって行く姿を見ると、なんだか嬉しい気持ち

になりました。また、ロカ岬では、家族全員の名前を記したユーラシア大陸最西端到達証明書を発行してもらいました。父親になったせいか、家族との思い出づくりが私にとっての旅の魅力になっています。

リスボンでは、家族が一緒でしたので、アパートメントタイプのホテルに宿泊しました。**アパートメントタイプのホテルにはキッチンが付いているので、食事はスーパーで購入した食材を調理して食べました。**リスボンは食材が豊富で肉も魚も美味しいです。レストランもいいですが、費用も抑えられるので、**グループで海外を旅行する場合には自炊もお勧めです。** 

ロカ岬は、ポルトガル共和国リスボン都市圏にあるユーラシア大陸最西端の岬。西には大西洋が広がり、その遥か先にはポルトガル領のアゾレス諸島がある。またここには、ポルトガルの詩人ルイス・デ・カモンイスの叙事詩「ウス・ルジアダス」第3詩20節の一節「ここに地終わり海始まる (Onde a terra acaba e o mar começa)」を刻んだ石碑が立っている。有料でユーラシア大陸最西端到達証明書を購入することが可能。証明書には名前や日付などが入り、裏面には主要国の言葉で書かれた上記の詩(日本語もある)が書かれたものを入手することができる。(photo=andrea floris)



上左：世界地震工学会議での発表。上中：ロシオ駅にて、息子2人と妻先生と一緒に。上右：シントラ・ムーア城壁。下右：ユーラシア大陸最西端、ロカ岬の石碑前にて。下中：ポルトガルの名物お菓子、パステル・デ・ナタ。下右：リスボンの夜景。



## Laboratory Report

# 地盤基礎研究室が地震工学の国際会議「WCEE15」にて研究成果を発表

text=太田宏（建築学専攻D4/地盤基礎研）

**W**CEE15(15th World Conference on Earthquake Engineering)とは、1956年からほぼ4年に一度行われる地震工学に関する国際会議です。今回は15回目であり、ポルトガルの首都リスボンで行われました。『国際会議』なるものへの参加は初めてでした。

ヨーロッパは比較的地震が少ない地域という印象があるかと思いますが、リスボンは1755年に大地震が生じ、それに伴って生じた火災、津波により大きな被害に見舞われました。会場では、震災直後のリスボンの様子などの絵画が口頭発表のセッションの合間にスクリーンに映し出され、当時の被害の大きさとその痛ましさを感じさせました。

研究内容の発表形式はパワーポイントなどを用いた英語による口頭発表で、私が発表を行った部屋では30人程度の席が用意されて

おり、満員御礼の状態でした。また、今回の国際会議では発表前にデータをサーバーにアップロードし、各セッションの部屋から自由にアクセスできるような工夫がされていたのが印象的でした。発表自体は出国する前に原稿を作成していたため滞りなく終わりました。

発表する際の言語に関係なく、発表後は気持ちが晴れ晴れとするものです。滞在期間中は比較的天気が良かったこともあり、とても清々しい気分でした。発表日以降は、発表会場に足を運び、世界各国の研究機関の研究に触れるとともに、現地を観光し、ポルトガルの空気を満喫して日本に無事生きて帰りました。

「駿建」を読まれる方は主に学生の方々だと思われそうですが、今後国際会議のような機会に遭遇したら、積極的に参加することをお勧めします。

駿

## Laboratory Report

# 山中研究室と空間構造デザイン研究室、ものづくり大学大塚研究室の合同による「OSSB panel structure」を船橋キャンパスに展示

**11**月1日から4日までの4日間、「OSSB panel structure」が、「第45回習志野祭」に合わせて船橋キャンパス中央広場で展示されました。

「OSSB panel structure」は新素材・OSSB 麦わら成形合板の物性及び木造軸組耐力壁への適用性に関する研究（第20回STEM研究財団助成）の一環として、山中研究室と同空間構造デザイン研究室、ものづくり大学大塚研究室の合同研究チームが設計し、両大学の学生たちが協働して施工した仮設建築物です。

麦わらの持つ美しい光沢がありながら、異方性が少なく耐水性や加工性にも優れています。また、それらの特性を活かし OSSB パネルそのもので自立する2方向の3ピンラーメンユニットを基本単位とした新しい構造システムを実現しています。

具体的には、4×8版の OSSB パネルを対

角線方向にカットし、4枚の板を矢羽状に組んだユニットを基本とし、これらを4つ以上組み合わせることで2方向の3ピンラーメンの格子状の空間を構成しています。このシステムはX軸、Y軸どちらの方向にも増殖可能なので、キオスクや屋台、仮設トイレ、足湯など規模を問わずさまざまな用途の建築へ応用していくことが可能になります。

今回の「OSSB panel structure」の展示は、「建築仕上材料技術・デザイン競技 2012 新しい建築空間を実現する建築仕上材料とその技術提案」（日本建築仕上学会主催）において最優秀賞を受賞した提案を、複数の大学が連携し、設計系、構造系、施工系の大学生たちが各々の研究分野の持ち味を活かし、コンペのアイデアを自分たちの手で実現したものです。施工は、11月26日から29日までの4日間で行われた。

駿



(photo=加藤雄生)



★受賞・ニュース

1 | 建築学科、久保貴子さんポスターコンペにて入選

株式会社アーバネットコーポレーション主催の「アート・ミーツ・アーキテクチャー・コンペティション 2012」ためのポスターコンペ（応募総数 336 点、審査員：長嶋りかこ（アートディレクター、デザイナー）他）において、久保貴子さん（建築学科 4 年 / 羽入・星研）の作品（下写真）が入選しました。

※関連 HP

<http://www.aac-compe.jp/poster/2012/>



2 | 横河健教授、2013 年 1 月号より雑誌「新建築」にて月評担当に

横河健教授が、雑誌「新建築」月評を 2013 年 1 月号より 1 年間執筆することになった。月評は、毎回前月号の同雑誌に掲載されたものを総括し、批評するコーナー。



3 | 空間構造デザイン研究室が「第 29 回全国都市緑化フェア TOKYO」にて東京都より感謝状を授与

空間構造デザイン研究室が「第 29 回全国都市緑化フェア TOKYO（9 月 29 日～10 月 28 日）」の協力に対し、東京都より感謝状を授与された。本フェアは「緑ゆたかな街づくり」をテーマとして、全国の都市公園を巡回しながら年 1 回開催されており、本年は都内の 6 つの公園をメイン会場として行われた。岡田研究室は本フェアにて仮設のイベントスペースを浜離宮恩賜庭園および日比谷公園に提供し、各イベントスペースは、岡田研究室の学部 4 年生および大学院生の手によって各会場 3 時間程度で建方が行われた。日比谷公園には情報スペースとしてアルミと膜でできた多面体のドームを、浜離宮恩賜庭園には休憩スペースとして張力膜のテントが設置された。（下写真）



★論文掲載

渡辺大助氏（建築学専攻 D3/ ミサワホーム総合研究所）、井上勝夫教授、鈴木俊男氏（淡路技建）連名の原著論文「異方性スラブの振動特性に関する基礎的検討」が日本建築学会環境系論文集第 680 号（2012 年 10 月号）に掲載された。

吉野涼二氏（大成建設）、三枝健二電子情報工学科教授、井上勝夫教授連名の原著論文「スリット状接続部により構成された電磁シールド室性能予測システムの開発 板状電磁シールド材料間スリット状接続部の電磁シールド性能に関する研究 その 3」が日本建築学会環境系論文集第 682 号（2012 年 12 月号）に掲載された。

川島和彦准教授、川鍋充範氏（本学卒業生）連名の原著論文「路面電車利用者の中心商業地区における回遊行動に関する研究」が、日本都市計画学会都市計画論文集 Vol.47、No.2 に掲載された。

赤澤加奈子さん（建築学専攻 D2/ 都市計画研）、根上彰生教授、宇於崎勝也准教授連名の論文「近代期の静岡県伊東市における別荘地形成過程に関する研究」が、日本不動産学会平成 24 年度秋季全国大会（第 28 回学術講演会）論文集に掲載され、同大会で発表が行われた。

4 | 星和磨短大助手、音響数値シミュレーションプログラムに関する書籍を出版

星和磨短大助手は、共著書「はじめての音響数値シミュレーション プログラミングガイド」（下写真）をコロナ社から出版した。音響数値計算のための数値シミュレーションの手法（有限要素法、境界要素法、時間領域有限差分法、音線法、CIP 法）について、数値計算に不慣れでも概要がつかめるように、特徴、基礎理論と定式化、コーディングについて丁寧に説明したもの。全手法のプログラムを掲載し、音響数値解析分野では希有な一冊となっている。



## 5 | 建築学専攻の石森祥多さん、市川恵理さん、番屋陽平さん、矢嶋宏紀さんが、「住空間 eco デザインコンペティション」で最優秀賞を受賞！

石森祥多さん（渡辺研）、市川恵理さん（山崎研）、番屋陽平さん（佐藤光彦研）、矢嶋宏紀さん（山中研）建築学専攻 M1、4名による作品「伸縮するDENによる空き教室の空間リノベーション」が、「住空間 eco デザインコンペティション-Real Size Thinking-」で最優秀賞を受賞した。このコンペティションでの最優秀賞の受賞は本学としては3年連続となる。毎年、大学院の「建築設計演習」として取り組んでおり、そのほかにも「入賞」1点、「協賛企業賞」2点も受賞した。

応募者がそれぞれの視点でエコについて考え、2.4m×2.4m×2.4mの中で表現するコンペで、入賞者は、1/1を自分たちで制作する。

最優秀賞を受賞した石森さんたちは、

少子化による学校の空き教室の増加をテーマとし、伸縮するデンを配置する事で7m×7mの空き教室空間をリノベーションし、子供たちでにぎわうポジティブな場へと変換させるものを提案。そのプロセスとコンペの面白さについて代表として番屋さんにお話をうかがった。

「リアルサイズで表現するということで、空き教室の現状を見ることと、現場の先生方に意見を聞きたいと考え、小学校の現場調査に訪れました。そのことにより、2次審査からさらに、作品を発展させていくことができました。

最も大変だったのはコストの問題。1/10の模型をそのまま1/1のモックアップにしようすると簡単に予算をオーバーしてしまう。しかし、予算という制限

によって余計な部分を省くことができ、案の精度が上がりました。

これまで体験してきたアイデアコンペは基本ボードを提出し、パワーポイントで発表するものがほとんどでした。しかし、今回のコンペは身体を動かすことで様々な人たちとの接点ができたり、1/1をセルフビルドでつくることで、賞以上のものを得ることができました。

僕が感じるコンペに参加する楽しみは、将来こうなったらいいなというビジョンを描くこと。学生時代のアイデアコンペは社会に対して問いかけるアイデアを出し、評価される最初の機会だと思います。また、同じテーマを違うアプローチで考えた他の参加者たちとアイデアや批評を共有することも楽しみの一つです。」



3次審査に残った4作品の原寸展示。奥が最優秀賞の作品、手前が入賞「ひらかれるハコ」。

☆最優秀賞「伸縮するDENによる空き教室の空間リノベーション」  
：石森祥多、市川恵理、番屋陽平、矢嶋宏紀

☆入賞「ひらかれるハコ」  
：飯景美（佐藤慎也研）、芳我まり子（今村研）、藤本陽介（佐藤光彦研）、山崎周拓（本杉研）

☆クリナップ賞「防災玉手箱」  
：武久忠正（横河研）、中田光（渡辺研）、原俊介（横河研）

☆積水ハウス賞「Jungle Gym+」  
：伊藤由華（山崎研）、ジャン・ジマン（今村研）、矢板悟（佐藤光彦研）、柳皓成（本杉研）



最優秀賞の作品「伸縮するDENによる空き教室の空間リノベーション」。5つのスライドする棚と、2つの開閉する棚を利用して、時に遊具として、授業時には、左右二つの教室に分ける空気を含む壁になる。地域開放でギャラリーとして活用するなど様々な場をつくる。

## 6 | 建築学専攻の武久忠正さんが、最優秀賞を受賞！ 「第2回リノベーションアイデアコンペティション」

### 第2回リノベーションアイデアコンペ

(審査員：馬場正尊、三浦展ほか)にて、大学院生の武久忠正さん（建築学専攻 M1/ 横河研究室）が、最優秀賞を受賞した。

テーマは、「リノベーションによる、新しい住み方」。ストック活用に合わせて、具体的な新しい住み方やそれを実現するコミュニケーションの仕組みが求められた。武久さんは、間取りの組み替えによって、住宅とコレクティブハウスやシェアハウスとの間で、さまざまな世帯が定住できるサスティナブルな集合住宅を提案した。

「二次審査の公開プレゼンでは A1 ボードや模型、パワーポイントの提出を求められ、とても大変でした。公開審査では、他の作品の方がよく見えたりしますが、そういった場面でも自分の作品に自信を持つことが良い結果に繋がりました。これまで自分が学んできたことを整理・分析・体系化する、その上に新たな提案や発見があるのだと改めて気付かされました。

数年後に僕たちは必ず社会に出るので、



それまでに学内だけでなく外に積極的に出て自分の実力を知る必要がある。その手段の一つとして、コンペへの参加は、学外の学生や社会人と争い、今の自分の実力を計ることができる貴重な機会だと思います。最前線で活躍する審査員の方々に意見をい

ただけることも刺激的です。だから、まだ参加したことのない人もコンペに一度参加することをオススメします。がんばった結果として、表彰されるだけではなく、賞金ももらえることもコンペの醍醐味なのかもしれません。」

## 7 | 学年を越えた設計製図講評会スーパージュリー開催 山本友梨香さんが最優秀賞を受賞！

西沢大良氏（建築家 / 西沢大良建築設計事務所）、安東陽子氏（テキストイルコーディネーター・デザイナー / 安東陽子デザイン）、猪熊純氏（建築家 / 首都大学東京助教 / 成瀬猪熊建築設計事務所）をゲストクリティックに招き、学部生の前期課題の優秀作品に対する公開講評会「SUPER JURY 2012」が10月6日（土）に、駿河台キャンパス 1 号館 151 教室にて行われた。

これは主に前期設計課題の優秀作品を全学年一堂に集め、講評会を行うもの。学部2年生から4年生までの設計課題優秀作品19作品の本人による発表と、ゲストクリティックと非常勤講師による講評会が行われた。ゲストクリティック3名と非常勤講師有志として複数名にご参加いただき、モデレーターを佐藤光彦准教授が務めた。講評会後は授賞式を兼ねた懇親会が行われ、各賞にはゲストクリテ

ィック3名とモデレーターの名前がつけられ、今年是最優秀賞と優秀賞各1作品が選出された。

☆最優秀賞：山本友梨香（建築学科3年）  
「新お茶の水小学校」（北岡伸一先生指導）

☆優秀賞：星衛・落合俊行・中島奈津美（建築学科4年）  
「渋谷東急および渋谷駅の再構築」（若松均先生ユニット）

☆西沢大良賞：三浦太一（建築学科2年）  
「住宅」（関本竜太先生指導）

☆安東陽子賞：宮本悠平（建築学科3年）  
「まちのライブラリー」（関野宏行先生指導）

☆猪熊純賞：西島修悟（建築学科2年）  
「住宅」（佐藤文先生指導）

☆佐藤光彦賞：森田秀一（建築学科2年）  
「パブリックスペース」（本間至先生指導）



毎号、一枚の建築写真！

# A Photo of World Architecture

vol.03

AuthaGraph



(photo=Masaki Onishi)

# Contents

## 02 [SPECIAL FEATURE]

### 世界を旅しよう

1. 海外研修旅行 A コース | 24 日間、ヨーロッパ 7 カ国、近現代建築を巡る旅
2. 海外研修旅行 B コース | 10 年ぶりにアメリカコースが復活! アメリカ 5 都市を巡る旅
3. TUD x CSTS デザインワークショップ  
| 11 年ぶり、ドイツ・ダルムシュタット工科大学とのワークショップ

## 12 いろんな旅を見てみよう!

4. タイ、シンガポール、マレーシア | 成長し続ける東南アジア 3 都市を飛び回る 10 日間!
5. パリ、リヨン、ローザンヌ、チューリッヒ | 海外を旅することは、感覚を磨くこと  
欧羅巴 5 都市 10 日間の男 2 人旅
6. コスタリカ、リベリア | 都会に住む動物は犬や猫だけじゃない  
25 日間グリーンツーリズムの旅
7. ドイツ、ヴァイセンホルン | 16 世紀の倉庫を 19 世紀に改装した  
小さな町に建つ劇場をを探し求めて
8. ポルトガル・リスボン | 26 泊 27 日、欧米 4 カ国周遊の旅 - リスボン編 -

## 18 [LABORATORY REPORT]

地盤基礎研究室が地震工学の国際会議「WCEE15」にて研究成果を発表  
山中研究室と空間構造デザイン 研究室、ものづくり大学大塚研究室の合同による  
「OSSB panel structure」を船橋キャンパスに展示

## 22 [A PHOTO OF WORLD ARCHITECTURE]

vol.03 AuthaGraph

## 24 [EVENT REVIEW]

mosaki のイベント巡礼 vol.3

「公共建築からソーシャルを考える 鶴ヶ島プロジェクト 2012」

# SHUNKEN

2013 Jan. Vol.40 No.4

「駿建」

発行日：2013 年 1 月 28 日

発行人：岡田章

編集委員：佐藤慎也・橋本修・川島和彦・田嶋和樹・山崎誠子・田所辰之助・高田康史

編集・アートディレクション：大西正紀 + 田中元子 / mosaki

発行：東京都千代田区神田駿河台 1-8-14 日本大学理工学部建築学科教室

TEL：03(3259)0724

URL：http://www.arch.cst.nihon-u.ac.jp

※ご意見、ご感想は右記メールアドレスまで<shunken@arch.cst.nihon-u.ac.jp>

# event review

mosakiのイベント巡礼 vol.03

## 公共建築からソーシャルを考える 鶴ヶ島プロジェクト2012

2012年12月3日(月) - 12月8日(土)

場所：渋谷ヒカリエ8階 クリエイティブスペース「8」COURT

### 行政×市民×建築学生 新しい建築教育の可能性

♥ 鶴ヶ島って、どっかの離島だと思ってた。

♣ 違う違う、埼玉県西部にある市の名前だよ。人口約7万人の典型的な郊外都市。なぜここが舞台かというと、東洋大学理工学部建築学科で教鞭を執っている建築家の藤村龍至さんが、東洋大学川越キャンパスの最寄り駅の鶴ヶ島駅に来る度にツイッターでつぶやいていたんだって。するとある時、市長からコンタクトがあって、そこから今回のプロジェクトにつながったのだとか。

♥ えっ、ツイッターがきっかけだったの！現代的だねえ。ヒカリエの会場には、白い模型がずらりと並んでいるけど…？

♣ 鶴ヶ島市を舞台に小学校とコミュニティー施設とを合わせた多機能ソーシャルデザインが、今回の課題。展示されているのは、東洋大の4年生たちがつくり、最終的に選ばれた9案。奥にはそれらがどんなプロセスで改良されてきたかというプロセスが展示されて



左：展示風景。すべての案のそこへ至るプロセスが、すべて展示されている。このプロジェクトは4年生の「総合設計演習」という授業で行われ、55名の学生が参加。数回のワークショップにおける市民との話し合いを重ね、それぞれの案をブラッシュアップしていった。普段の設計課題より学生たちのモチベーションが格段に違ったという。右：オープニング時に行われたトークセッション。



いる。

♥ ああなるほど。こうやって見ていくと、ひとつの案がどんな道のりを辿って、どんなところをがんばってきたのか、わかりやすいね。

♣ これらの案は、設計する本人だけが考えてきたのではなく、3ヶ月に及ぶ市民とのワークショップや、先生だけでなく学生同士との講評など、さまざまな意見が取り入れられたもの。さらにこのプロジェクトでは、はじめに学生が3タイプに分けられている。批判的な設計をする「作家」、前提条件を受け入れる「技術者」、調査分析から建築を企画する「プランナー」。それぞれの立場から作業を並走させていく、という試みだったんだよ。

♥ 最終案を見ていくと、それぞれの特長が出ているね。どの方向がいい悪い、って単純化できない。これらが総合されることが求められているんだね。

♣ 今回の展示では、アンケートで観覧者がどの案を気に入ったか、投票できるようになっている。実は9案が選ばれるまでの過程でも、投票が何度も行われてきたんだって。自分の案にどんな反応があるかドキドキするし、見る側も、投票のために、より真剣になって見るよね。こういうプログラムも、学生が管理進行したらしい。

♥ 行政の資料を読み込むところから始めて、ワークショップして、設計案をみんなで改良していくという、まさに社会的な内容。これは学生のうちはなかなかできないとも、逆に学生のうちだからこそできるとも言えるような、そんな貴重な体験だね。

♣ 街にこれから起きる変化に向けて、建築に携わる人々に何ができるのか。鶴ヶ島プロジェクトは、そんなことに市民も行政も大学生も、ひとつのテーブルの上で一緒に向き合う装置でもあったんじゃないかな。

## Recommend | 2012年10 - 12月

【1】「坂 茂 建築の考え方と作り方」| 水戸芸術館 (茨城県水戸市五軒町1-6-8) | 2013年3月2日(土) ~ 5月12日(日)

建築家・坂茂のこれまでの創作と活動を包括的に紹介する日本で初めての大規模個展が、ついに開催される。紙管をはじめさまざまな材料や構法を用いて、世界中で建築作品として実用化する坂茂の作品群を、写真、映像、模型、立体展示でたどる。3階建てのコンテナ仮設住宅の実物大も屋外に展示する。

【2】「デザイン展」| 21\_21 DESIGN SIGHT (港区赤坂9-7-6) | 2013年2月8日(金) ~ 6月2日(日)

身の回りにあるものをデザインの視点から見つめ直すことで、「デザインの面白さ」を伝える子供向け教育番組「デザインあ」(NHK E テレ)を、展覧会というかたちに発展させた企画。音や映像も活かしながら、全身で体感できる展示を通して、デザインマインドを育むための試みを、さまざまに示す。ディレクションは、同番組をつくる佐藤卓、中村勇吾、小山田圭吾の3名。

【3】「始発電車を待ちながら 東京駅と鉄道をめぐる現代アート9つの物語」| 東京ステーションギャラリー (千代田区丸の内1-9-1) | 2012年10月1日(月) ~ 2013年2月24日(日)

昨年10月に東京駅の復原工事が完了し、3階建ての丸の内駅舎がオープン！工事と同じく休館していた東京ステーションギャラリーもリニューアルオープンし、新装開業を祝う展覧会が開催されている。出品されるのは、「東京駅」あるいは「鉄道」という視点から発想されたアート作品。秋山さやか、柴川敏之、廣村正彰、本城直季、ヤマガミユキヒロ、大洲大作、クワクポリョウタ、パラモデル、廣瀬通孝の9人が、東京駅や鉄道を発想源にしたユニークな作品を創建当時の煉瓦壁を生かした歴史を感じさせる展示室で展開する。

## 【編集後記】

「駿建」がリニューアルしてから3号目。今回は、毎年行われている海外研修旅行に合わせて、学生のみなさんや先生方の旅を合わせて「海外の旅」の特集をつくりました。学生のみなさんは、どれくらいの方が海外へ行ったことがあるのでしょうか。もちろん言葉も文化も違うところへ行くことは、それなりの大変さとストレスを伴います。しかし、その先には日本での生活では得ることのできない体験と気づきがあることが、今回のレポートでもわかっていただけたのではないのでしょうか。今回取り上げることはできませんでしたが、きっとあなたの周辺の人たちにはもっと魅力的な旅をしている方がいるかもしれません。是非、機会があれば話を聞いてみてください。そして次はあなたの番です。もし、あなたがステキな旅をしたら、その興奮を是非「駿建」でレポートさせてくださいね。

(大西正紀 + 田中元子 / mosaki)